

香りと『紅樓夢』：薛宝釵の冷香丸を中心に

垣見，美樹香
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9623>

出版情報：中国文学論集．30，pp.52-67，2001-12-25．九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



香りと『紅樓夢』

——薛宝釵の冷香丸を中心に——

垣 見 美樹香

はじめに

漢代を代表する美女姉妹の趙飛燕・趙昭儀は、共にその美しい身体から魅惑的な香りを発していたと言われる^①。また、玄宗皇帝を虜にした唐美人の代表である楊貴妃も馥郁たる香氣を身に纏っていたとされる^②。更にまた、乾隆皇帝に寵愛された清朝稀代の美女「香妃」も馨香を漂わせていたと伝えられる^③。これらの典型例からも容易に類推されるように、香りは、古来、美女を特徴づける要素の一つとも言うべきものであり、由来、美女を象徴するものとして意識されてきた^④。それは、「国色天香」「香消玉減」などのような、香りを美女そのものであるとする語句が数多くあることによっても端的に示されよう。そしてまた、ここに挙げた美女達の香りを以ってしても察せられるように、女性の香りは時として男性を強く惹きつけるものである。裏を返せば、これは、男女の恋愛に於いて、香りが重要な要素であることを意味している。なるほど、文学作品に就いて見ても、例えば『西廂記』や『醒世恒言』、『警世通言』などに於いて、男女の情愛を描くのには、「偷香竊玉」といった故事が用いられているように、香りが男女の情愛に深く関わる小道具として重要な役割を果たしている例が数多く見られるのである。

そして、『紅樓夢』の場合もその例外ではなく、美女やそれに関連する事物を象徴する香りが随所に取り込まれ、それらは、賈宝玉との関わりの中でも重要な意味合いを持つものとして用いられている。その最も顕著な表象が、薛宝釵の専用薬である冷香丸の香りである。

筆者は先に拙稿「薛宝釵と冷香丸」に於いて、冷香丸が賈宝玉と薛宝釵の宿縁である金玉縁に深く関わっていることを指摘した。その折に気付いたことが、この薬が常に香りと表裏一体となっていることであつた。しかも興味深いことに、その香りは、薛宝釵自身が「……えも言われぬ香りなのですよ、一体どこで手に入れなかつたのやら。」（第七回）と形容するほど、際立つて強烈且つ独特の香気を放っているのである。こうした見地に立つと、この薬の香りも薬と同様に、金玉縁に深く関わる重要な意味を持つ設定となっていると推察される。

そこで本稿では、この独特な香気を放つ冷香丸の薬香に着目し、それが金玉縁とどのように関わっているのか、またそれに隠蔽されている具体的な意匠は何であるのかを考察したいと思う。

一、冷香丸の香りと金玉縁

周知の如く、玉を持って生まれた賈宝玉と金鎖を所持する薛宝釵は金玉縁という宿命によって結ばれる。⁽⁷⁾ 実のところ、この金玉縁を象徴する金鎖と冷香丸との間には、非常に密接なつながりがある。というのは、この二つはいずれも、幻境と俗界に通ずる癩頭和尚によって薛宝釵に授けられているからである。

そして、作中に於いて、薛宝釵が冷香丸を常用していることは、その薬香によって具体的に示されている。即ち、薬香の方が薬効成分に較べてより具体的な役割を賦与されているのである。

このように考えると、金玉縁には、冷香丸の香りが何らかの形で関わっていることが推察される。事実、第八回には、次のように金玉の話の最中に賈宝玉が初めて冷香丸の香りに気付く場面がある。⁽⁸⁾

（賈宝玉と薛宝釵が互いにそれぞれの玉、金鎖を見せ合う場面）賈玉此時與寶釵就近、只聞一陣陣涼森森甜絲絲的幽香、竟不知是何香氣、遂問「姐姐燠的什麼香？我竟從來未聞見過這味兒。」寶釵笑道「我最怕燠香、好好的衣服燠的烟燠火氣的。」寶玉道「既如此、這是什麼香？」寶釵想了一想、笑道「是了、是我早起吃了丸藥的香氣。」寶玉笑道「什麼丸藥這麼好聞？」好姐姐、給我一丸嘗嘗。」寶釵笑道「又混鬧了。一個藥也是混吃的。」（賈宝玉と薛宝釵が互いにそれぞれの玉、金鎖を見せ合う場面）……宝玉はこの時宝釵のすぐ傍で、ひとしきり

のひんやりと甘ったるいほのかな香りを嗅ぎましたが、嗅いだこともないような香りでしたので、そこで尋ねます、「お姉様がお焚きになつてゐるのは何のお香ですか？ 私はいまだかつてこのような香りは嗅いだことがありますせん。」宝釵は笑つて、「私は香の匂いが大嫌いですが、折角のよい着物を煙でいぶして匂いをつけたりするなんて。」宝玉は言います、「そうだとしたら、これは何の香りですか？」宝釵はあれこれと思いをめぐらし、笑つて言います、「そうですね、私が今朝方飲んだ丸薬の香りですわ。」宝玉は笑つて言います、「このようないい香りがするのはどんな丸薬ですか？ お姉様、私に一粒味見させてください。」宝釵が笑つて、「またでたらめを。一粒の薬でもやたらと召し上がるものでもありませんわ。」

また、殊に金玉縁を意識する林黛玉も、次のように冷香丸の香りを金鎖と連環を成すものとしてとらえている。

寶玉總未聽見這些話、只聞得一股幽香、卻是從黛玉袖中發出、聞之令人醉魂酥骨。寶玉一把便將黛玉的袖拉住、要瞧瞧着何物。黛玉笑道「冬寒十冷、誰帶什麼香呢。」寶玉笑道「既然如此、這香是那裏來的？」黛玉道「連我也不知道。想必是櫃子裏頭的香氣、衣服上薰染的也未可知。」寶玉搖頭道「未必。這香的氣味奇怪、不是那些香餅子、香毬子、香袋子的香。」黛玉冷笑道「難道我也有什麼羅漢真人給我些香不成！便是得了奇香、也沒有親哥哥親兄弟、弄了花兒、朵兒、霜兒、雪兒替我炮製。我有的是那些俗香罷了。」……「我有「奇香」、你有「煖香」沒有？」寶玉見問、一時解不來、因問「什麼煖香？」黛玉點頭歎笑道「蠢才、蠢才！你有玉、人家就有金來配你、人家有「冷香」、你就沒有「煖香」去配！」

宝玉はそんな話にはまるで耳を貸そうとせず、ひとすじのほのかな香りが漂ってくるのを嗅いでいた所、何と黛玉の袖の中から生じたもので、嗅ぐと魂も骨もとろけてしまひそうでした。宝玉は黛玉の袖を引っ張り、中に何を隠しているのか見ようとします。黛玉は笑つて、「十月のこの冬の寒い時期に、誰がお香なんて持ち歩きましようか。」宝玉は笑つて、「そうだとすると、この香りはどこから来るのだろうか？」黛玉は「私だって分かりませんわ。きつと簞笥の中の匂いが、着物に染み付いたものかも知れませんわ。」宝玉は頭を振りながら、「そうとは限らないぞ。この香の匂いは奇妙だぞ、香餅や香毬、香袋といった類の匂いではありませんよ。」黛玉は冷笑して、「まさか私まで羅漢真人様とやらが下さった香など持っていないせんよ！ たとえ珍しい香を頂

いたとしても、私のために花だの蕾だの霜だの雪だのを集めて、お薬を調整してくれるような実の兄も弟もおりませんわ。私にあるのはありきたりの香だけですよ。……」私に「奇香」があるとして、あなたに「煖香」はあるのですか？」宝玉はそう聞いても、何やら分からず、そこで尋ねます、「煖香というところ？」黛玉はうなずきため息まじりに笑って言います、「本当に間が抜けてらっしゃるのですから！ あなたに玉がおありになるからこそ、誰かさんにそれと対になる金がおありなのでしょう、誰かさんに「冷香」がおありなら、あなたにそれと対になる「煖香」がおありになるのではなくて！」

(第十九回)

これらの場面を見るに、冷香丸の香りは、金玉縁を暗示する伏線として看做すことができよう。

ところで、薛宝釵の大観園に於ける住居は、香草に囲まれた蘅蕪苑である。彼女がこの香りゆかしい館と結び付いている主因は、一に冷香丸を服用していることにある。そのことは、次のように王伯沆が蘅蕪苑と冷香丸を結び付けて評を施していることによって十分察せられる。

蘅蕪苑多栽香草、最易以香惹人、故釵居之、好吃冷香丸、其明証也。

蘅蕪苑に多く香草を植えているのは、香りが最も人を惹きつけやすいからであり、薛宝釵がここに住み、好んで冷香丸を服用しているのは、その明らかな証拠である。

(第五十六回)

このように、冷香丸があまにも強烈且つ独特の香氣を放つために、薛宝釵と作中の様々な香りが結び付いている例は他にも見られる。例えば、先に触れた、香草に囲まれた蘅蕪苑の主であることに因み、彼女は「蘅蕪君」という別号を持っており、「香君」とも呼ばれている。また、薛宝釵の兄の妾である香菱は、英蓮、香菱、秋菱と三度も名が変わるが、その中の「香菱」という名をつけたのが、他ならぬ薛宝釵である。そしてまた、後に詳しく触れるが、薛宝釵の「影子」的な存在である襲人の名も、陸游の詩の「花氣襲人」という文句に因んで付けられており、香りととの関連が見られる。

更に、このように薛宝釵と香りとが深く結び付いているために、金玉縁が香りとして象徴されている例も見られる。今、それらの例を挙げると、まず第八回の題詩には、「古鼎新烹鳳髓香……、試看金桂對玉郎。」とあり、薛宝釵をさす金桂と賈宝玉をさす玉郎の仲を象徴するに当たって、香りととの結び付きが見られる。次に第十七、十八

回では、食客の一人が作る蘅蕪苑の聯に「三徑香風飄玉蕙。一庭明月照金蘭。」とあつて、金玉と香りとが同時に用いられている。この聯の金玉が金玉縁を現していることは、ここに附せられた太平間人（張真之）の評に「此一聯點金玉之合。」（第十七回）^[1]と見えることから自ずと明らかであり、従つて、ここでもまた金玉縁が香りとして象徴されていると解せられる。続いて第二十八回では、次の如く金玉縁の場面を盛り上げるための小道具として、他ならぬ香珠が用いられている。

此刻忽見寶玉笑問道「寶姐姐、我瞧瞧你的紅麝串子。」可巧寶釵左腕上籠着一串、見寶玉問他、少不得褪了下來。寶釵原生的肌膚豐澤、容易褪不下來。寶玉在傍看着雪白一段酥臂、不覺動了羨慕之心、暗暗想道「這個膀子要長在林妹妹身上、或者還得摸一摸、偏生長在他身上。」正是自恨沒福得摸、忽然想起金玉一事來。再看看寶釵形容、……比林黛玉另具一種嫵媚風流、不覺就歎了。寶釵褪了串子來遞與他、也忘了接。寶釵見他怔了、自己倒不好意思的、丟下串子、回身纔要走、……。

この時宝玉はにこにこしながら、「宝釵お姉様、私に麝香練りの赤い香珠を拝見させて下さい。」と言います。折よく宝釵はそれを左腕に一つはめていましたので、宝玉にせがまれて、やむなく取り外しにかかります。ところが宝釵は生まれつきぼっちゃりとしていて、容易に取り外せません。宝玉は傍で雪のように白いならかな腕を見ていると、思わず羨ましくなり、心ひそかに思います、「この腕がもし黛玉さんについていたなら、或いは少し触ることはできたかもしれないのに、あいにくとこの人についているのだものなあ。」と、まさに触る幸せに恵まれない自分を恨んでいるちやうどその時、突然金玉のことを思い出します。再び宝釵の様子に眼をやりますと、……林黛玉とは別に一種なまめかしい艶やかな趣があり、思わずぼんやりとしてしまいます。宝釵が香珠を取り外し宝玉に手渡そうとするも、宝玉は受け取るのも忘れています。宝釵は彼の呆けた様を見て、自分の方が気恥ずかしくなり、香珠を放り投げ、身を翻して行こうとすると、……。

別にまた、この回では、襲人と蔣玉菡との縁にも茜香羅の腰帯が重要な伏線となることが暗示されており、回目には「蔣玉菡情贈茜香羅 薛寶釵羞籠紅麝串」と、腰帯と香珠とが対となって記されている。つまり、香りが重要な伏線となっている襲人の運命が同じ回に描かれることによって、薛宝釵の同様な運命、即ち、香りが金玉縁の重要

な伏線となつてゐることが象徵されているのではあるまいか。

そして、金玉縁が香りとして象徵されていることを裏付けるかのように、林黛玉と香りとの関わり方は、賈宝玉との関連に於いて負、即ち、否定的な関わり方として現れている。例えばまず第十六回では、北静王から授けられた香念珠を賈宝玉が譲ろうとすると、林黛玉は無下に断る。

賈玉又將北静王所贈薔苔香串珍重取出來、轉贈黛玉。黛玉說「什麼臭男人拿過的、我不要他。」遂擲而不取。

宝玉は北静王から賜った薔苔作りの香珠を大事そうに取り出し、黛玉に贈ろうとします。黛玉は「そんな臭い男の人が持っていたものなど、私は要りません。」と言ひ、放り投げて手に取ろうともしません。

次に第十七、十八回の賈宝玉と言ひ争ひをする場面では、香袋を切り裂いてしまふ。

(林黛玉) 賭氣回房、將前日寶玉所煩他作的那個香袋兒——纔做了一半——賭氣拿過來就鉗。

(林黛玉) プンプンして部屋に帰り、数日前に宝玉が作ってくれとせがんだ香袋——やっと半分できたものを——怒りにまかせて取り出すや否やはさみを入れてしまいました。

続いて、第二十九回の賈宝玉と諍いをする場面では、香需飲という薬を吐き出してしまふ。

襲人見他臉都氣黃了、眼眉都變了、從來沒氣的這樣、便拉着他的手、笑道……林黛玉一行哭着、一行聽了這話說到自己心坎兒上來、……越發傷心大哭起來。心裏一煩惱、方纔吃的香需飲解暑湯便承受不住、哇的一聲、都吐了出來。

襲人は宝玉の顔が怒りに青ざめ、眼も眉の様も変わっているのを見て、今までこれほどお怒りになられたことはなかったことだと思ひながら、彼の手を引いて、笑つて言ひます……黛玉は泣きながら、この話を聞いていましたが、自分が心の奥底で思っていることを言ひ当てられた気がします、……なおさらつらくなくて声をあげて泣き出します。そんな心中の煩いで、さっき飲んだばかりの香需飲や解暑湯を受けとめられなくなって、みな吐き出してしまいました。

以上を要するに、冷香丸の香りが金玉縁を暗示する伏線であることは、作中の様々な香りが金玉縁と密接なつながりを持つことから確認することができる。更にまた、薛宝釵と林黛玉の香りとの関わり方が、それぞれ正、負

として現れていることも、そのことの間接的な傍証となつていえるであろう。

二、十二釵の香りと淫

それでは、この金玉縁を暗示する冷香丸の香りにはどのような意味が隠蔽されているであらうか。一体、この香りに付与されている具体的な意匠は何であるのか。

第七回の記述を見ると、冷香丸の構成材料の分量には、次の如く全て十二という数が使用されている。

春天開の白牡丹花藥十二兩。夏天開の白荷花藥十二兩。秋天的白芙蓉花藥十二兩。冬天的白梅花藥十二兩。雨水這日的雨水十二錢。白露這日的露水十二錢。霜降這日的霜十二錢。小雪這日的雪十二錢。十二錢蜂蜜。十二錢白糖。十二分黃柏。

この十二という数について、脂硯齋に次のような興味深い評がある。

凡用十二字樣、皆照應十二釵。

十二という字を用いているのは、十二釵に照応している。

(第七回甲戌本)⁽¹³⁾

脂硯齋はここで、冷香丸の十二という数は、十二釵の十二に呼応するものであると指摘している。この見解に従うとすれば、冷香丸と十二釵との間には、何かしら相通する所があるということになろう。そこで、十二釵の香り、それも冷香丸の香りと同様、賈宝玉と関わりのある十二釵の香りを検索してみると、前八十回では、秦可卿、金釧、襲人、鴛鴦、林黛玉、この五人の香りが挙げられる。今、これらの共通点を考えてみると、賈宝玉との関連に於いて、「淫」との関わりがあるという点で一致しているように思われる。以下、そのことについて詳しく述べていくことにしたい。

まず、秦可卿の香りの場合、彼女の香りは、賈宝玉の「淫」と直接に結び付いている。第五回に於いて、秦可卿の香閣で午睡をする賈宝玉は、夢の中で可卿という仙女に男女の道である「雲雨の事」を伝授される。この賈宝玉の「淫」が描かれる場面では、次のように香りが特に強調されている。

……大家來至秦氏房中、剛至房門、便有一股細細的甜香襲人。寶玉便覺眼錫骨軟、連說「好香。」……那寶玉剛合上眼、便惚惚的睡去、猶似秦氏在前、遂悠悠蕩蕩隨了秦氏、至一所在。（賈宝玉が「淫」を體驗する夢の世界）……更見仙花馥郁、異草芬芳、真好個所在。……（警幻）攜了寶玉入室。但聞一縷幽香、竟不知其所焚何物。寶玉遂不禁相問。警幻冷笑道「此香塵世中既無、爾何能知。此係諸名山勝境初生異卉之精、合各種寶林珠樹之油所製、名爲『羣芳髓』。」

……皆が秦氏の部屋へとやって来ますと、入り口に着いたとたんに、ほんのりと甘い香りが鼻をつきます。宝玉は目がとろんとして体から力が抜けたように感じ、「いい香りだ。」と連発します……宝玉は目を閉じたたとんに、たちまち眠りに落ちましたが、まだ秦氏が前にいるような感じがし、ふらふらと秦氏の後についていくと、とある所にやって来ました。（賈宝玉が「淫」を體驗する夢の世界）……珍しい草花が芳しい香りを放ち、まことに素晴らしい場所です。（警幻）宝玉を従えて部屋に入ります。ひとしきりのほのかな香りが漂っているも、何のお香が焚いてあるのかわかりません。宝玉はついにこらえきれずに尋ねます。警幻は冷笑して言います「このお香は俗世にはない品、あなたが知るわけがありません。これは由緒ある名山で生えたばかりの珍しい草のエキスト、さまざまな種類の珍しい木の油とを混ぜ合わせて調合したもので、名を『羣芳髓』と言います。」ここで特に注意すべきことは、香りを媒介とすることによって、賈宝玉が現実世界の秦可卿の部屋から夢の世界へと移動していることである。つまり、賈宝玉が夢で「淫」を體驗する際に嗅ぐ香りは、現実には、秦可卿の部屋の香りなのである。その意味で、秦可卿の香りは、賈宝玉の「淫」と直結していると言えよう。

次に襲人の香りについて見てみたい。先に触れたように、彼女の名は、陸游の詩の「花氣襲人」という文句に因んで付けられており、香りとの関連がある。名付けたのは、他ならぬ賈宝玉である。実は、この賈宝玉の行為に対して、父である賈政が、次のように彼を叱責する場面がある。

賈政問道「襲人は何人？……丫頭不管叫個什麼罷了、是誰這樣刁鑽、起這樣的名字？」……寶玉見瞞不過、只得起身回道「因素日讀詩、曾記古人有一句詩云「花氣襲人知晝暖」。因這個丫頭姓花、便隨口起了這個。」……（賈政）「只是可見寶玉不務正、專在這些濃詞艷賦上作工夫。」

香りと『紅樓夢』

賈政は尋ねます「襲人というのは誰のことかね？……女中をどのように呼ぼうと構わないが、誰がこんな風変わりな名前を付けたのかね？……宝玉は隠し通せないと見て、やむなく身を起こして答えます「普段詩を読んでいるうちに、古人のある詩の「花の香の人を襲いて晝の暖かきを知る」という句を覚えただけです。それでこの女中の姓が花であったので、よく考えもせずそのような名を付けたのです。」……（賈政）「これだけのことから見ても宝玉が本業に励まずに、専らこうした淫らな詩賦に時間を費やしていることがわかるというものだ。」

（第二十三回）

ここで賈政は、襲人という名の由来である詩文を「濃艶」という語で以って批判している。厳格で堅物な賈政の性格から察するに、この言葉には、「淫」と同趣の意が込められていると思われる。こう考えると、襲人の香りは、賈宝玉との関連に於いて、「淫」と関わっていると言えよう。

続いて鴛鴦の香りの場合、彼女の香りに触発された賈宝玉が彼女に対して「淫」の氣を抱く、次のような場面がある。

回頭見鴛鴦穿着水紅綾子襖兒、……寶玉便把臉湊在頸項間那香油氣、不住用手摩娑、其白膩不在襲人之下。便猴上身去……。

振り返って見ると、鴛鴦が淡紅色の綾絹のあわせの着物を着て……宝玉は顔を首筋に近づけ香油の香りを嗅ぎ、しきりに手でなでさります。その色の白さときめ細かさは襲人に劣りません。そこで体の上にしなだれかかってゆきます……。

（第二十四回）

更に金釧兒の香りは、賈宝玉と彼女のからみに密接に関連している。金釧兒という女性には、賈宝玉とふざけ合っている内について淫靡な言葉を口にし、それが原因で、遂には井戸に身を投げる運命にある。実は、その賈宝玉とふざけ合う場面では、次に示すように「香雪潤津丹」という香字を持つ薬が用いられる。

寶玉見了他、就有些戀戀不捨的。……便自己向身邊荷包裏帶的香雪潤津丹掏了出來、便向金釧兒口裏一送。金釧兒並不睜眼、只管噙了。

宝玉は彼女（筆者注…金釧兒）を見たときに、恋々とした思いを抱きました。……そこで自分が身につけてい

る巾着の中から持薬の香雪潤津丹を探り出し、そのまま金釧児の口の中へ送りこみます。金釧児は目も開けず
に、ただそれを口に含むのでした。

(第三十回)

そして、この場面の伏線と思われる第二十三回の場面、即ち、太平間人が「淫豔の極み」と評を施す次の場面では、
金釧児は自ら香りを以って賈宝玉に戯れていく。

金釧一把拉住寶玉、悄悄的笑道「我這嘴上是纔擦的香浸胭脂、你這會子可吃不吃了？」

金釧児は宝玉を引っ張り、ひそひそと笑いながら、「私のこの唇には今塗ったばかりの香の染み込んだ紅がつ
いていますわ、あなた少しばかりお食べになりますか？」

つまり、こうして見ると、金釧児に関わる香りは、賈宝玉と彼女の「淫」と思しき戯れの場面に色濃く影を落とし
ていると言えよう。

最後に林黛玉の香りの場合、彼女の香りは、賈宝玉との関連に於いて、とりわけ深く「淫」と結び付いている。例
えば、第二十六回に、賈宝玉が『西廂記』の文句を引用して、林黛玉に戯れる場面があるが、それは、次のように
林黛玉の香りの描写から始まっている。

舉目望門上一看、只見匾上寫着『瀟湘館』三字。寶玉信步走入、只見湘簾垂地、悄無人聲。走至窗前、覺得一
縷幽香、從碧紗窗中暗暗透出。寶玉便將臉貼在紗窗上、往裏看時、耳內忽聽得細細的長歎了一聲道「『每日家
情思睡昏昏。』」寶玉聽了、不覺心內癢將起來。再看時、只見黛玉在牀上伸懶腰。寶玉在窗外笑道「爲甚麼『每
日家情思睡昏昏』？」一面說、一面掀簾子進來了。……寶玉笑道「……『若共你多情小姐同鴛帳、怎捨得疊被鋪
床。』」

目を上げて門の上を見ると、扁額には「瀟湘館」(筆者注…林黛玉の住まい)の三字が記されています。宝玉は
足のおもむくままに入ってゆきますが、湘妃竹の簾が地に垂れ、ひっそりとして人の気配もありません。窓の
前まで行くと、ひとしきりのほのかな香りが、緑色の紗をはった窓からひそかに漏れ出でているのを感じまし
た。宝玉はそこで紗がはつてある窓に顔をくっつけ、中の方を見ると、にわかにかすかな長い嘆息の声で、
『日ごと夜ごと情を思いうつらうつら』(筆者注…『西廂記』第二本第一折)と言うのが聞こえてきました。宝

香りと『紅樓夢』

玉はこれを聞くと、思わず心中むずむずしてきました。再び見ると、黛玉が寝台の上で背伸びをしているのでした。宝玉は窓の外から笑いながら、「どうして『日ごと夜ごと情を思いうつらうつら』なのですか?」と言いつつ、簾をめくって入って行きました。……宝玉は笑って、「……『もしもそなたの情深き姫さまと、共に鴛鴦の帳に入れたならば、褥の世話などさせるに忍びぬ。』」(筆者注…『西廂記』第一本第二折)と言います。

『紅樓夢』に於いて『西廂記』は、賈宝玉と林黛玉の情愛に緊密に絡むものとして設定されている一方、他方では、『誨淫の書』として扱われている。これは、逆の視点から見ると、『西廂記』が引用される箇所では、張君瑞と崔鶯鶯の色恋の道をして、賈宝玉と林黛玉の男女の恋情が描出されている、と見ることが出来る。賈宝玉がここで、『同鴛帳』という所謂男女のことを表す言葉を用いて、林黛玉に戯れるのは、その最も顕著な一例だと言える。かく見てくると、林黛玉の香りの描写に始まるこの場面には、賈宝玉と林黛玉の男女の恋情、即ち、「淫」を意識した情愛が描出されていると解せられよう。林黛玉の香りが、賈宝玉との関連に於いて「淫」と結び付いていると述べる所以である。

三、冷香丸の香りと淫

以上の考察から、賈宝玉と関わりのある十二釵の香りは、それぞれ何らかの形で「淫」と結び付いていることがわかる。では、薛宝釵の香り、即ち、冷香丸の香りはどうなのであるうか。果たして、「淫」と関わりがあるのであろうか。この問題に示唆を与えてくれるものとして、太平間人が先の「淫」に関わる秦可卿の部屋の聯の「嫩寒鎖夢因春冷。芳氣襲人是酒香。」という文句に、次のような評を施していることに注目したい。

……兩末字乃「冷」「香」、則金鎖、冷香丸方是真正主人翁。

……兩末の字の「冷」「香」は、即ち金鎖、冷香丸が真の主人公であることを言っている。

『三家評本紅樓夢』(第五回)

この評に拠れば、この句には、金鎖、冷香丸が暗示されていることになる。つまり、金玉縁が秦可卿の「淫」の場

面に関わっている、即ち、冷香丸の香りが「淫」と関わっていることを意味していることになる。そして更に注目すべきは、次に挙げるように、冷香丸の箇所⁽¹⁵⁾に施される脂評が、先に触れた賈宝玉が夢で可卿と「雲雨の事」をする場面に施される脂評と相応じていることである。

【冷香丸】

奇奇怪怪、眞如雲龍作雨。忽隱忽見、使人逆料不到。

(第七回甲戌本)

【秦可卿の場面】

奇奇怪怪之文、令人摸頭不著、雲龍作雨、不知何爲龍、何爲雲、又何爲雨矣。

(第五回有正本)

また、薛宝釵の香りについては、次のような脂評が見える。

不知比『羣芳髓』又如何。

『羣芳髓』と比べて、どのようなものであるかはわからない。

(第八回甲戌本)

即ち、ここに於いても、薛宝釵の香りは、先に触れた秦可卿の「淫香」に関わる『羣芳髓』と比較して評されている。要するに、これらの脂評は、薛宝釵の香りが秦可卿の「淫香」と同じ次元に位置している、換言すれば、薛宝釵の香りが「淫」と関わるものであることを間接的に示唆していると言えよう。更にまた、作中に於いて、薛宝釵に「国色天香」という雅号を持つ牡丹の花の象徴が見られることによって⁽¹⁶⁾、薛宝釵の香りと「淫」との結び付きは裏付けられる。というのは、彼女の牡丹は、その艶麗な容姿が楊貴妃の妖艶な容姿に似通うことに因んでのことであり、前出の第二十八回の場面に象徴的に示されるように⁽¹⁷⁾、そのような彼女の豊満な容姿に賈宝玉が「淫」まがいの欲望を感じる場面が多々見られるからである。

以上の事から考えれば、「淫」と関わる冷香丸の香りによって暗示される金玉縁には、必然的に「淫」が絡まってくることになる。即ち、金玉縁の在り方をこのようにとらえた時、賈宝玉と薛宝釵の仲が肉の交わりを伴う俗縁であることの有力な根拠を得たことになるのではあるまいか。

おわりに

最後に、香りと「淫」との関わりに関連して、香りと「情」との結び付きについて少しく触れておきたい。

『紅樓夢』に於いて「淫」と「情」は、表裏一体のものとして設定されている。例えば、第五回に、警幻仙姑が賈宝玉に「意淫」について語る次の場面があるが、ここでは、「淫」は「情」によって生ずるもの、即ち、「淫」と「情」とは不離一体のものであることがはっきりと述べられている。

好色即淫、知情更淫。……吾所愛汝者、乃天下古今第一淫人也。……如爾、則天分中生成一段癡情、吾輩推之爲「意淫」。

色を好むということは淫であって、情を知るということは更に淫であるのですよ。……私があなたを好んでいるのは、あなたが天下古今第一の淫人であるからですよ。……あなたは、生まれつきの癡情の持ち主、私達はそのようなのを「意淫」と称しております。

このように、「淫」と「情」とが一体のものであるとすれば、香りと「淫」との結び付きには、当然「情」が関連していることになる。いま、そのことを確かめるために、十二釵の中でもとりわけ「淫」との関わりが深い秦可卿の香りを例に挙げて見ていくことにする。先にも触れたように、彼女は、「淫蕩」に流され、終には天香樓で自縊する運命にある。秦可卿のこのような運命は、実は第五回の「金陵十二釵薄冊」に於いて、「情天情海幻情身、情既相逢必主淫」という語で以って暗示されている。この語によれば、彼女の「淫」は、「情」に幻惑翻弄され、「情」とらわれるが故のものであることになっている。つまりここに於いて、天香樓での「淫」による秦可卿の死は、「情」に由来するものであることが明確に示唆されているのである。従って、「淫」と結び付いている秦可卿の香りが、「情」に直結していることは言うまでもないであろう。

以上の如く秦可卿の香りを例に採って、香りと「淫」と「情」との結び付きを確かめてみるに、「淫」と香りと結び付きは、「情」に直結することがわかる。このような設定は、一体如何なる意味を持つのであろうか。思う

にこれは、香りが「情」の裏返し、即ち、「情」を象徴する小道具として設定されていることを意味するのではあるまいか。「淫」は、決して表にはできないテーマである。それ故、『紅樓夢』では、「淫」は「情」によるもの、即ち、「淫」の表には「情」というテーマが設定されている。つまり、「淫」は「情」の裏返しのものとなっているのである。とすれば、香りが「淫」と結び付いている場合、その香りも、「情」の裏返しのもの、即ち、「情」の象徴となつていふことができよう。

本稿では、冷香丸の香りに隠蔽されている具体的な意味を明らかにするとともに、それが賈宝玉と薛宝釵の宿縁である金玉縁を暗示する伏線としての役割を担っていることを指摘した。夥しい論文著書を数える『紅樓夢』研究にも関わらず、香りについての研究は、美女や大觀園との関連についての考察が見られるだけで、冷香丸の香りについての論考は皆無に等しい。このことは、従来、『紅樓夢』に於いて、冷香丸の香りが殆ど意識されていないことを顕著に示す。しかし、本稿のこれまでの考察を以てすれば、冷香丸の香りは、そこはかとなく、而も確かに漂う非常に重要な設定だと言えらるであらう。作者が冷香丸の香りを殊更に強調する所以の一端は、正しくここに求められると筆者は考えるのである。

注

(1) 『飛燕外傳』に「后浴五蘊七香湯、踞通香沉水坐、潦降神百蘊香、婕妤浴葦葦湯傳露華百英粉、帝嘗私語樊嬪曰、后雖有異香、不若婕妤體自香也。」と見える。

(2) 『開元天寶遺事』(王仁裕撰『開元天寶遺事十種』所録、上海古籍出版社 一九八五年)「紅汗」に「貴妃每至夏月、……每有汗出、紅膩而多香、……。」と見える。

(3) 『清稗類鈔』(徐珂編撰 中華書局 一九八六年)異稟類「香妃體有異香」に「回王某妃以體有異香、號香妃、國色也。……妃已氣絕、而異香不散、……。」と見える。

(4) 『楚辭』に於いても美女を香草に見立てた歌が数多く見られる。

香りと『紅樓夢』

(5) 『晋書』「賈充傳」にいう、「充每譙賓僚、其女輒於青瑣中窺之、見壽而悅焉。……婢後往壽家、具說女意、并言其女光麗艷逸、端美絕倫。壽聞而心動、便令爲通殷勤。婢以白女、女遂潛修音好、厚相贈結、呼壽夕入。……家中莫知、惟充覺其女悅暢異於常日。時西域有貢奇香、一著人則經月不歇、帝甚貴之、惟以賜充及大司馬陳騫。其女密盜以遺壽、充僚屬與壽燕處、聞其芬馥、稱之於充。自是充意知女與壽通、……。」と。「偷香竊玉」はこの故事に由来するもので男女の私通を意味する。

(6) 拙稿「薛宝釵と『冷香丸』——薬の描写から見た『紅樓夢』の人物設定——」(九州大学中国文学会『中国文学論集』第二十八号 一九九九年十二月)。

(7) 『紅樓夢』は、一名『金玉縁』とも称する。

(8) テキストは俞平伯校訂の『紅樓夢八十回校本』全四冊(人民文学出版社 一九九三年)を使用し、本文の引用は全てこれに拠った。また、本文の訳は適宜伊藤漱平訳『紅樓夢』(平凡社 一九九六～九七年)を参照した。

(9) 『王伯沆紅樓夢批語匯録』(江蘇古籍出版社 一九八五年)。

(10) 「村居書喜」詩に「花氣襲人知驟暖、鵲聲穿樹喜新晴。」(『劍南詩稿』卷五十)とある。ちなみに、襲人の名がこの詩に因んで付けられていることは、第三回の「寶玉因知他本姓花、又曾見舊人詩句上有『花氣襲人』之句、遂回明賈母、既更名襲人。」という場面から明らかである。

(11) 『三家評本紅樓夢』(原名『增評補像全圖金玉縁』 上海古籍出版社 一九八八年)。以下、大平間人の評は全てこれに拠る。

(12) この点に関しては、林方直氏も『紅樓夢符号解讀』(一九九六年 内蒙古大學出版社)の中で、「第二十八回回目作『蔣玉函情贈茜香羅、薛寶釵羞籠紅麝串。』既然茜香羅汗巾子成了蔣玉函與襲人的婚姻紐帶、那麼與之對應的紅麝串當然也是寶釵與寶玉的紅綫」と述べておられる。

(13) 俞平伯『脂硯齋紅樓夢輯評』(香港太平書局 一九七五年)。以下、脂硯齋評は全てこれに拠る。

(14) ここで、参考までに述べておくと、そもそも秦可卿の香りは、彼女自身の「淫」をも象徴する、とりわけ「淫」との関わりが深い香りであると言える。というのは、秦可卿は、「淫蕩」に流され、終には天香楼に於いて自縊する運命

にあるからである。(秦可卿の死については、初稿に於いて第十三回の回目に「秦可卿淫喪天香樓」と記されていたことが脂評などを通じて知られている。)つまり、「淫」の行き着く果てが天香樓であるということは、「淫」と香りとが分かちがたく結び付いている、即ち、秦可卿の香りが「淫香」であることを象徴していると考えられるのである。(秦可卿の香りについては、張世君氏も「香氣在叙事中的空間建構」(『紅樓夢』的空間叙事) 中國社会科學出版社 一九九九年)の中で、「比如秦氏房間『甜香襲人』、它建構出充滿脂粉氣的空間俗香……這種俗香也暗示着淫香。……秦氏室內的香描写還保留着『淫喪』的暗示、這種俗香是一種淫香、……。」と、彼女の香りが淫香だと述べておられる。)こう考えると、賈宝玉の「淫」が彼女の香りに直結しているのは、何ら不思議なことではないように思われる。

- (15) ちなみに、「雲龍作雨」という語に注目するならば、他にも第一回到「雲龍霧雨」、第十七、十八回到「雲龍作雨之勢」という語を用いた脂評がある。だが、これらの評は、秦可卿の評のように冷香丸の評と相應じるものではない。

- (16) 薛宝釵が牡丹の花を象徴していることは、第六十三回の花籤の場面に於いて、彼女が牡丹の籤を引くことから窺うことができる。薛宝釵と牡丹の象徴關係については、稿を改めて論究するつもりである。

- (17) この第二十八回の場面については、何滿子氏『中國愛情小説中的兩性關係』上海書店出版社 一九九九年)も「他(筆者注：賈寶玉)看着薛寶釵雪白的酥臂、起了想摸触一下的欲望(第二十八回)、這欲望當然是肉的、……。」と、高淮生氏「『紅樓』之『淫』的啓示」(『紅樓夢學刊』 一九九九年 第一輯)も「第二十八回寫寶玉要瞧寶釵臂上香串子……寶玉由寶釵身体之肌膚美的刺激或可說由她的性感之吸引……。」と指摘をなされている。

- (18) 彼女の死と「情」との結び付きについては、脂硯齋に「借可卿之死、又寫出情變態……」(第十三回總批)という指摘がある。

- (19) 主なものとして、前掲(14)の張世君「香氣在叙事中的空間建構」「虛化空間的文節点：嗅覺香的空間暗示」(『紅樓夢』的空間叙事) 中國社会科學出版社 一九九九年)、王海燕「尋香漫步紅樓」(『紅樓夢學刊』 一九九九年 第三輯)などがある。

- (20) ただし、薛宝釵の人物形象を考察する際に、冷香丸の香りについて少しく触れている論考は、例えば井波陵一氏の「薛宝釵を飾るもの」(『滋賀大学国文学紀要』第三十一号 一九九三年)がある。

香りと『紅樓夢』